
Bullet-time

ある

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Bullet-time

【Nコード】

N1896U

【作者名】

ある

【あらすじ】

大学1回生になった主人公、鷹尾誠哉^{たかお せいや}は一人暮らしを始めていた。

初めての一人暮らし、暇をもて余した鷹尾は友人から激しく勧められたVRMMORPG（多人数同時参加型オンラインRPG）「Nostalgia Ruins Online」通称「N・R・O」の魅力に取りつかれる。

N・R・Oでは剣や魔法は飛び交わず、現代社会と同じような銃器

を使い、戦略・戦術を組みながら戦う、FPSであり、仮想世界の中で人間を合法的に殺す事ができる。

そんなゲームにはまり込んでしまった鷹尾は、家に引きこもり、毎日N・R・Oの中で過ごしていた。
しかし、ある日ゲーム内での死亡と同時に別の世界に入り込んでしまう。

そこは銃声と血に満ち溢れた世界だった。

f i r e
0

ひゅっ

喉から小さな音が洩れる
額から流れ出た汗が覗き込んだ円を侵食しようとしていた。

どくん

どくん

身体中から血液の流れる音がし、それを送り出すポンプが静寂に音をばらまく。

痺れるような緊張感とはりつめた空気。

円の中に写るのは自分と同じように地面に這いつくばり、此方を狙う…見知った顔。

1秒が刹那に引き伸ばされ…

「大好きだ。だから。お前を殺す。」

炸裂音と亜音速を超える弾が作り出すソニックブーム。

そして標的に着弾したであろう大きな破壊音が、瓦礫と屍で彩られた街に響き渡った。

用語集

本作では使用しない用語などがありますが、参考程度に流し読みをしていただければと。

A i m エイム

敵に照準を合わせる動作のこと。

特にFPSではA i mの力量が戦績を左右する。

A s s a u l t R i f l e アサルトライフル（AR）

連射系の武器アサルトライフル。AK47やM16、M4A1などの突撃銃のことを指す。

A u t o A i m オートエイム

照準を自動で補助すること。

照準が敵にむかって自動追尾するタイプと、一定範囲内であれば修正して発射されるタイプがある。

F P SやT P Sではチートを指すことが多い。

A t t a c k e r アタッカー

積極的に攻撃に参加する人のこと。

a w a y f r o m k e y b o a r d アウェイ フロム キーボード（AFK）

キーボードのそばにはいないということ。

R O Mはリードオンリーメンバーで発言せずに読むだけの人。

a m m o アモ

弾のこと。

bot ボット

対戦型FPSの練習台になるコンピュータキャラクター。

MMORPGでは自動操縦チートの意味をさすことが多いが、FPSでは純粹な練習台や、PCの代わりとして参加させることが多い。

Back Kill バックキル

背後から襲って倒すこと。

Clan クラン

ユーザー同士が集まって継続的に形成するチームのようなもの。他のオンラインゲームではギルドにあたる。

クロスヘア

照準として表示されるマークこと。

カッティングパイ

見晴らしの良い場所に移動する際、警戒しながらの移動すること。

クロスファイア Crossfire

多方向から複数人で攻撃を加えること。十字放火。

Camp キャンプ

敵を待ち伏せすること。

攻めるべき状態でもキャンプを続ける人は、キャンパーとして敬遠されることがある。

C o - o p コープ

プレイヤー同士の協力プレイでNPCと戦うモード。

C o v e r カバー

味方の補助をすること。

D e f e n d e r デイフェンダー

守備する人。

F i r s t P e r s o n S h o o t e r ファーストパーソン・
シューター (FPS)

一人称視点シューティングという意味で、ゲーム画面はキャラクター
の視点となる。

F i r e ファイア

FPSで銃器を発砲すること。

F r i e n d l y F i r e フレンドリーファイア (FF)

味方を誤って攻撃すること。

G o o d G a m e グッドゲーム (gg)

良い勝負の時、敵味方を称える言葉。

Good Job グッドジョブ (gJ)

良い結果が出た時、味方を褒める時に使う言葉。
GOOD LUCK グッドラック (gI)

対戦直前の士気を高めるお決まりの文句。

Game Master ゲームマスター

主に運営側のサポート役のことを指す。

health ヘルス

プレイヤーの体力のこと。

Head Shot ヘッドショット (hS)

敵の頭を撃つこと。

FPS・TPSではダメージが大きくなることがほとんど。

Lag ラグ

通信時間が原因で遅延が発生すること。

ラグが多いFPSは無敵になるなどの支障をきたす。

Lean リーン

壁際などに隠れながら覗き込む動作のこと。

multi play マルチプレイ

複数のプレイヤーで対戦するためのモード。

NewBie ニュービー

新兵、初心者のこと。

Noob ノーブ

ニュービーの略語でこちらのほうが一般的。

本当の初心者というより、自分勝手や使えない奴のニュアンスが強い。

無闇に他人に向けて発して良い言葉ではありません。

NiceFight ナイスファイト (nf)

良い活躍をしたプレイヤーの検討を称える言葉。

Ping ピング

ゲームサーバーとクライアントの通信状況の目安。

低いほど快適にゲームができる。

読み方はピングでもピンでも構わない。

P l a y e r S k i l l プレイヤースキル（ps）

個人のプレイヤーの技量。

p r i m a r y プライマリー

メインに使用する銃。サブはセカンダリー

P 2 P ピアツーピア通信

クライアント・サーバーの概念が無く、ノード同士で通信が確立される通信方法。

プレイヤー環境により接続されるため、FPSゲームでP2P通信が採用されるとラグが起きやすくなる。

R e c o i l リコイル

発砲時の反動による跳ね上がりを指す。

リコイルコントロールは跳ね上がりを抑えながら撃つこと。

r e l o a d リロード

武器の弾を補給すること。

R o g e r ラジャー

了解。

R e s p a w n K i l l リスポーンキル（リスキル）

復活直後の人を倒すこと。

復活時の無敵時間が長いFPSでは逆に返り討ちにしやすい。

s k i n スキン

プレイヤーや武器の外見のこと。

ユーザーが作成したスキンを、運営の許可なく使用することはチートになります。

S p r i n t スプリント

ダッシュにより速度をあげること。

T e a m K i l l チームキル（TK）

味方を倒してしまうこと。

T h i r d P e r s o n S h o o t e r サードパーソン・シューター（TPS）

カメラが三人称視点のシューティングゲーム。

fire 1

パンツ

右手にあるベレッタM92（自動拳銃）が乾いた音と共に薬莖を弾き出し、今日1日の狩りが終了した。

狩っていたのは、BOTと呼ばれる10人程度のNPC集団。
ノンプレイヤーキャラ

クエストとして設定されているテロリスト殲滅。

勿論、相手はモンスターや動物等ではなく人間である。

NPCではあるものの、最初はその人を殺す感覚に耐えきれず、口から胃液を垂れ流したものだ（実際は吐いていないが）

しかし、毎日毎日むさ苦しい髭面の男どもの相手をしているといい加減なれてくるもので、今ではただの作業となっている。

精密に再現され、リアルな重さと消炎の匂いを漂わせるベレッタM92を眺めながら、ふと思案に浸る。

昔とは異なりVRをフルに活用したゲームの中で、このVRSTG、
バーチャルリアリティ
「N・R・O」は日本社会からの反対を押しきって発表された。

「繊細に表現された仮想世界で人を殺すゲーム」はFPSマニア、ミリタリーマニア達からはまさに涎を垂らしてでも飛び付きたくな

る程の完成度を誇り、正式稼働に先駆けて行われた テストのテスト倍率は10000倍とも言われている。

更に、N・R・Oは通常のFPSとは異なり、プレイヤーにレベルステータス、スキルが設定されており、個人の好むスタイルでゲームを楽しむことができる。

そして、それだけではなく銃器、その他武器にも経験値が設定され、愛用の武器を強化する事ができるのだ。

いわゆる、STG・FPSを中心に作られたVRMMORPG（多人数同時参加型オンラインRPG）となる。

実際にファンタジーを主に剣、魔法が飛び交うVRMMORPGはかなりの数が存在しているが、このN・R・Oのようなゲームは存在していない。倫理的な問題もあり各ゲーム会社が自重していたこともあるが、それを打ち破ったN・R・Oが有名になるのは当たり前のことであつたといえよう。

そして、俺。鷹尾誠哉。

今までゲームなんてやったことも無かったが、友人に勧められ始めたこのゲーム。

正式稼働から1年

俺は引きこもり廃人になっていた。

「はぁ…もうだめだしにたい」

N・R・Oを始めてはや1年。最初の方は大学の講義にも顔を出していたのだが、今は家を出ることすらほとんどない。

そしてとうとう

今日、現実にて鷹尾の元に大学からの成績表が届いた。

取得単位数 4

1年間で取ることが出来る最大取得単位数は48。

卒業に必要な単位数136。

分かっていた事だが、これはまずい
非常にまずい

鷹尾の通う大学は進級に必要な単位数は設定されていないので、と
りあえず進級はできるが、このままだと確実に卒業が危うい。

普通の人間なら、こんなにまずい状況になってしまった場合、もち
ろんゲームを止めるだろう。

しかし、どつぷりとハマってしまっている廃人の思考は恐ろしい。

「まずい…けど。だけど…来年から頑張ればいいんだよな！うんう
ん。ゲームもしながら大学も頑張ればいいんだよ！！」

嫌な事からは逃げるのみ。

「何はともあれ、明日だよな。明日はCW（クラン戦）があるから、
今日はこれでログアウトしておくか」

右手を振り、コマンドメニューを呼び出しログアウトボタンを押す。

ログアウトしますか？

Y e s / N o

Y e s を押す。

視界が暗転し…俺の体はV R から現実に戻った。

fire 2

N・R・Oにおいて、戦術は多種多様に存在する。

何故なら、個人が各々の好きなようにステータスを振り分け、更には個人が好む銃器を強化することができるからだ。

ステータスとは単純に

STR	：筋力
AGI	：瞬発力
VIT	：体力
INT	：精神力
DEX	：命中力
LUK	：運力

この6項目になっている。

例えば、大型銃器を扱うのであれば、その武器の重さを扱う為の必須STRをクリアする必要がある。

勿論、直接の格闘にも必要にはなるがSTRだけを上げた所で、AGIが高い相手には攻撃が当たらない。

このようにこの6項目にステータスポイントを振り分けることにより、個人の戦闘力に色々な種類が生まれ、通常のFPSに比べ決められた武器によって兵科が固定されることは無い。

だからこそ戦術に幅が生まれる。

「と、こんな感じだ。分かったか？ Newbieの諸君？」

今は、クラン戦を前に先日うちのクランに入隊してきた3人の新人達に教鞭を取っている最中だ。

教鞭というのも真剣な話で、自分達のクランにあてがわれたハウスの一室でホワイトボードの前で、律儀にノートを出して必死に何かを書き込んでいる彼らの前で教師さながらな講義を行っている。

「ではファルコンさん、このゲームではプレイヤーの腕が重視されるのではなく、ステータスが重視されるのですか？」

ファルコンと言うのは、勿論俺のハンドルネームHNであり、本名の鷹から取って着けた名前だ。正直安直すぎてあまり好きではない。

「そうだな。従来のFPSに比べて確かにN・R・Oはステータス重視傾向にある。しかし、いくらステータスが高くとも根本的な所はやはりセンスだ。同じステータス同士が戦えば、武器のレベルやスキルに差があるかもしれないが、最終的には己のセンスが勝利の鍵になる。だからこそ、お前らはステータスを上げるだけでは無く、己のセンスを磨くように努力しないといけない」

えー。だの、どうやってセンスを磨けっというんだよ。
などの声が聞こえる。

こめかみがピクピクする

元々、こう言う指導をするには俺は向いていないのに…
キレてもいいかな？
いいよね？

おっし

「おま

ぱんっ

手を叩く音と共に、部屋の隅の椅子に腰掛けていた優男がクスクスと笑いながら声を上げた。

「さて、そろそろ時間だよ。ファルコン君も、そこら辺りでおしまいね。はい。君たちはロッカールームに行って装備を着用、最終点検後ブリーフィングルームに集合。さあ行った行った」

ガヤガヤと話ながら、新人達が部屋を後にする。

「お前なあ…。こんな損な役目を俺に押し付けておいて、キレることも許さないのかよ」

ぶつける事が出来なかった怒りもあり、少し拗ねた感じで優男に愚痴をこぼしてみる。

「いやいや、なかなかどうして。立派な先生をやっていましたただ少し気が短いようですが。それに…」

一旦言葉を止める。

優男はクスクスと笑っていた表情を改め、真面目な顔で話を続けた。

「押し付けたのではなくて、これは正式な罰ですよ。ファルコン君がこの前のCWで、前線単独偵察の任を無視して、1人でトリガーハッピーしながら敵陣に突っ込んだ事に対するね。君の腕は悪くない。でも偵察兵、狙撃兵としての一番大切な事を分かっていない。だからこそその新人教練役なのです。」

くっそ

そんなことは誰に言われなくても自分が一番分かっている。

俺は気が長いとは言えない。

なのに…なんでこんなステータスにしてしまったのか

こんなステータスというのはSTR・DEXの2極ステある程度、AGIには振り分けているが、完璧な狙撃兵ステである。

黙りこんでいる俺を後目に、優男は真面目な表情を崩し、笑いながら背中を叩いてきた。

「まあ、反省はしているようですし、虐めるのはやめにしましょうか。」

「って、虐めていたのかよっ！！はあ… 本当にお前は性格最悪だな。ギース」

この優男の名前はG I Sで正しくはジスと読むらしい。

銀髪、翠眼。

中性的な顔立ちと華奢な身体。いつも口には爽やかな笑み。

まさにイケメン。

死ねっ

イケメン死ねっ

呪詛のような言葉をぶつぶつと呟く。

「まあまあ。ファルコン君もなかなかイケメンですよ。あはは。

さあて、そろそろブリーフィングの時間ですね。私達が遅れては示しがつかない。そろそろ行きましょうか。」

「お前に言われると、気持ち悪いな。確かに遅れるのはまずいな行くか。」

今日のCWはN・R・O、No.1クランを決める為のトーナメント出場権をかけている大切な試合だ。

俺は頬を叩き、気を引き締め直した。

ブリーフィングルームに到着すると、もう作戦説明は始まっていた。30名程度の男が、暗い部屋の中で壇上にいる女を見上げている姿はどこか滑稽で笑いそうになる。

「糞鷹。遅れてきておいて何が面白い。そんなに額にケツの穴をこさえて欲しいのか？」

顔と性別に似合わない言葉を言い捨てているのは、N・R・Oでは珍しい女性キャラクターかつ俺が所属しているクラン「Wheel of Fortune」のCMである、カレン。名前とは裏腹に全く可憐ではない。

アタッカーとして前線アサルトライフルでARを振り回しながら男達を引き連れ、敵を紙のごとく喰いちぎる姿は「羅刹姫」「ヴァルキリー戦女神」などと揶揄されている。

俺から言わせるとクレイジーな鬼女だ。

「すいませんでした。カレン様。ケツ穴は1つで十分です。」

と言いながら、一番後ろの椅子に腰掛ける。

カレンはその様子を見て満足したのか、俺のことを冷やかな目で見つめるのは止めて説明に戻る。

「さて。とりあえず今日のCWに出るメンバーが揃った所で、最初から説明をやりなおそうか。今日の戦闘は市街におけるフラッグ戦

だ」

モニターに1つのフィールドが表示される。

複雑に入り組んだ街の中心に枯れた噴水があり、その噴水に黄色のマーカ―が点滅している。

「Newbieもいるので、フラッグ戦についても説明しよう。簡単には言つと、制限時間以内にこの黄色いマーカ―、所謂フラッグを奪取。自陣ポイントに持ち帰れば、その時点で勝利だ。また、相手兵士を全てキルした時点でも勝利となる。しかし、市街戦においてそれは時間的にも難易度が高いので、今回は考えなくとも良い。」

カレンは一呼吸いれると、レーザーポインタを切り、机の上に置いた。

「と、まあここまでは基礎的な説明だ。ここからは参謀であるギースに作戦内容を説明してもらう」

頼んだぞ、とギースに一声いれながらカレンは最前列にある自分の席に戻った。

「では、作戦内容について説明します。今回の戦闘におけるポイントは3つ。1つ目は市街戦であること。狭い路地や入り組んだ地形、これにより同士打ちの危険性を避けるためにスリーマンセル（3人組）を3小隊設定します。このチーム分けは皆の手元にある資料に

記載しているので後で見てください」

ペラペラと紙を捲る音が聞こえる。

後で、と言われても今見たくなるのは仕方ないことだろう。

「2つ目は時間制限内でのフラッグ先取。ここで必要なのは勿論スピードです。先にフラッグを奪取されると、後手に回ることになります。さっきも言ったと思うけど、今回は市街戦。フラッグを奪取して逃げる敵を追いかけるのは、トラップも含め非常にリスキーなのは皆にも分かるでしょう。だから何としても先にフラッグを奪取すること。スピードを重視して偵察兵は出しません。各小隊が3つのルートを使い己の出来る範囲で最速を目指してください。」

「そして最後に……ここです」

先程カレンが使用していたポインタを使い、噴水を指し示す。

「この噴水回りは直径100mほどの円形をしています。見晴らしが良く遮蔽物が殆どない。絶好の狙撃を受けるポイントですね。もちろん突入前にはSGスモークグレネードを投げるとは思いますが、それだけでは甘い。赤外線スコップ付きライフルを装備されていれば裸も同然。頭を吹き飛ばされて死のダンスを踊ることになります。その対策として……」

ギースが此方をチラリと見る。

成る程。

「俺が敵の狙撃兵を排除。更に広場に接近、侵入する敵の排除をするってことだな」

「その通りです、ファルコン君。君がこの作戦のキーと言っても過言じゃない。だからといって制限人数10人をオーバーするわけにはいかない。観測手や護衛を付ける訳にはいきません。それでも大丈夫ですか？」

俺はニヤリと笑って言い放つ。

「そんな事を聞くなよ、ギースお前はただ命令すればいいんだ。キツパリと、偉そうに、やってこいってな。」

「聞かないと、またキチガイみたいに単独で突っ込むだろが」

鬼マスターカレン様から冷徹なツツコミがはいる。

ぐぬぬ。

何も言い返せないのが悔しい。

「まあいい。一通り説明がついたようだしな。おい、お前ら!!」

「「おうっ
」」

野太い声が部屋に響き渡る。

「お前らはなんだ」

「「糞野郎どもであります!!」」

「糞野郎どもが求めるものはなんだ」

「「勝利のみであります!!」」

カレンは机の上に立ち上がる。

「敵には鉛弾を。私達には栄光を。D o r d i e ! ! ! !」

「「Y e s ! ! D o r d i e ! !」」

なんだこのノリは…

と、言いつつ気分が高揚していくのを俺は感じていた。

fire 3

CWだけではなく、チーム戦において情報伝達は非常に重要だと言える。

特に小隊が入り乱れる戦闘において、頻繁に情報を取り合っていないければ、角を曲がった先にいた味方をFF（味方を撃つこと）してしまうことや、味方が仕掛けたワイヤートラップと連動させたクレイモア（対人指向性地雷）を作動させてしまい、小隊が1つ全滅なんてこともある。

なので、基本的に戦闘を行う兵士は雑音が入らない骨伝導マイクを装着しており、それにより情報を伝達している。

「こちらシュラケン。ポイント3を通過。目視での接敵は確認できず。このままルートAを進行10分後ターゲット付近に到着予定」

振り分けられた3小隊のうち西側ルートを進むCチーム小隊長シュラケンよりの無線が入る。

これは最終ポイントを超え、待ち伏せなどが無いかを知るための連絡でもある。

「こちらファルコン。そちらが進むルートの頭上において敵は確認できない。更には敵狙撃兵も確認できず。」

「了解。周辺警戒をレッド。これよりBパターンで進行する。」

早く見つけてくれよ、という小言を最後に通信が終了された。

くそっ

そう簡単に発見できるわけがないだろファック。

狙撃兵に取って、場所取りが一番重要だ。

まず視界の確保。これは基本的に高台を使う場合が多い。

高台はより広く見渡せるため、スナイピングポイント狙撃場所として絶好の場所になるからだ。

しかし、自分が見えているということは相手からも見えているというこ

芋スナ、糞スナとなると定点から移動せずにスコープを覗き込んだまま敵を探索するが、さすがにこのクラスまでくるとそんな事をやっていれば額で煙草を吸う羽目になる。

観測手がいれば自分で探索しながら、連絡を受けたりしなくてすむのだが、今回は全て1人でやらなければいけない。

敵に発見されないように気を配りながら、味方が撃たれる前に排除する。

なんて重労働なんだよ。ファック。

二回目のファックを吐きながら双眼鏡を覗き込んでいると、通信が入った

「こちらカレン。フラッグ地点近くに到達。」

早すぎる。

先程のシュラケンチームからの通信から3分も経っていない。

慌てながら返答する。

「こちらファルコン。まだ敵狙撃兵は確認できていない。多少の間を貰いたい」

「無理だな」

容赦ない即答が返ってきた。

「なっ。だが…」

「私達がここまで到達した、ということは敵のエースもまもなく到達するだろう。作戦上、フラッグの先取は絶対条件だ。ここでもたつくことはできない。私達が突入すれば貴様も役割を果たせるだろう?」

それは…

確かにそうかもしれない。

カレンが言っているのは、自分達小隊を囷にして敵狙撃兵を誘きだす、ということだ。

この戦術自体はチーム戦においてよく使用され、それなりの効果はある。

しかし、向こうの狙撃が早ければこちらのリーダーであるカレンをはじめとする小隊がキルされてしまう可能性が高くなるのだ。

「大丈夫だ。私達、いや私は貴様を信じている。人柄云々は別として腕は確かだ」

「だが、あまりにもリスクすぎる。カレンが殺られたら、部隊が瓦解するぞ！」

「別に殺られてもリアルで死ぬわけでは無い。まあ、勝負には負けるかもしれないがな。それに先にお前が敵狙撃兵を殺ればほぼ勝ちだ。グダグダ言わずにさっさと了解しろ。糞鷹」

もう何を言っても無駄だな。こいつはやると言ったらやる女だ。

「了解。∴ Good Luck カレン」

「合図と共にSGを投擲、その後突入する。Good Luck フアルコン」

通信が切られる。

「やるしかないな」

こついう緊張感は嫌いじゃない。

しかし、まったく…クレイジーな女だ。
リーダーが囃とは。

手に持っていた双眼鏡を投げ捨て、長年の相棒である チェイタツ
クM200を構え、スコープを覗く。

緊張故か渴く唇を無性に舐める。

まだか…

まだか…

「3・・・2・・・1・・・Go！」

ぼすんっ

合図と共にくぐもった爆発音が響き、白い煙幕が広場を被い隠す。

通常のスコープでは目視は不可能となった。

しかし、赤外線スコープで狙撃は可能。
敵狙撃兵は勿論それを使って来るだろう。

神経を研ぎ澄ませる。

突入からまだ3秒。いやもう4秒か。
一流なら4秒あれば2人はキルできる。

スコープから見える空間全体を広く見る。

一瞬小さな光が目を刺した。

「発見」

スコープからでる僅かな反射光を捉えた。

銃口を標的へと修正。

クロスヘアの中心に標的を捕捉。

俺と同じような高さの建物の屋上で射撃体勢をとり、
幾何学迷彩をアーバンカモ着用している姿が見える。

そして、こちらに向いている黒光りする銃口も。

一瞬の反応。

トリガーを引く。

と、同時に頭に強い衝撃。

バツコーンッ

音が遅れて聞こえてくる。

弾は相棒に直撃。

そしてその衝撃で俺は射撃ポイントとしていた、地上20mから地面へ向かって叩き落とされた。

これだけの高さなら即死は間違いないだろう。

見つめた視線の先でも、灰色の塊が落下している。

「相討ちかよ……。ファック」

俺は本日三度目のファックとともに、意識を暗闇へと手放した。

f i r e 3 (後書き)

6 / 2 5	6 / 2 3
誤字修正	誤字修正

fire 4

「んぬう…畜生。…いてえ」

額から伝わるズキズキとした痛みで眼をさました。

俺は瓦礫が積もる路地の上に気を失って倒れていたようだ。

頭に被っていたPASGTヘルメット（防弾性能付戦闘用ヘルメット）は右前面から側面にかけて大きく破損しており、衝撃の激しさを物語っている。

「む。死んでない…？」

確か、20mもの高さから落下したはずなのだが、身体は少し痛む程度で大きな怪我は見受けられない。

「まあなんにせよ、ラッキーだったってことかな」

そうなればぐずぐずしているわけにはいかない。

相手の狙撃兵も撃ち落としたとは言え、まだ戦闘継続中だ。自分がどれぐらい気を失っていたのかは分からないが、時間制限を超えた場合と試合が終了した場合にはMAPから強制的に転送されるフラッグ戦において、まだ転送されずにMAPにとどまっていると言うことは戦闘中なのだろう。

「こちらファルコン。敵狙撃兵と相討ちにはなったが、無力化に成功。現状はどうなっている？」

「……………」

カレンに通信を取って見るが、反応はない。

TS（チーム全員への通信）で先程と同じ内容を繰り返すが、反応はまったくない。

「くそつ。マイクまでイカれちゃったのか？」

右前方に銃身とスコープが破壊されたバラバラなチェイタックM200の姿が見える。

それを拾い集め、とりあえず物陰に隠れる。
周囲の安全を確認し、応急処置を試みた。

「むむつ。これは…無理だな。」

スコープだけなら廃棄して新しいのを買えば良いのだが、銃の根幹でもある銃身が破損しているので、タウンに戻ってガンスミスに修理を依頼しなければいけない。

「さて。そうと決まればとりあえず自陣に戻るとするか」

アーマについた砂埃をはらい、立ち上がる。

自陣がある方角は南。

距離にすれば約1kmと言った所。

まだ居るか分らないが、敵にも警戒しながら進むとなると30分程度でつくだろう。

1時間後

「まだ着かないのかよ!!」

俺はまだ歩いていた。

40分を過ぎた所から警戒進行も馬鹿らしくなり、歩きやすい道の真ん中をてくてくと歩いている。

回りの景色も延々と廃墟の街並みのみ。

さすがにイライラとしてくる。

ある映画で主人公が1人誰もいない街に残され、寂しさのあまりキチガイみたいな言動を行う、と言うものがあつたが、今ならその気

持ちが分かる気がする。

たった1時間程で何を馬鹿なと言われるかもしれないが、これは本当にキツイ。

独り言でも良いから声を発していないと街に呑み込まれてしまいそうになる。

「そついや、あの映画って結局どうなったんだっけかな。」

確か、人がいなくなったのは何かのウイルスが蔓延して、それから逃げるために都市から人がいなくなってしまっ、だったような。

ウイルスに感染するとゾンビみたいな化け物になってしまっ

嫌な事を思い出した。

エンディングは主人公が化け物に追い詰められて、爆弾を起動。自爆するんだっ。...

ここが例えゲームの中だとしても爆死でグチャグチャにはなりたくない。

現にクレイモアに引っ掛かり、大量の鉄球を身体に浴び穴だらけになって死んでいった奴を見たことがあるが、あれは…うん。かなり痛そうだった。

このゲームでは実際に死ぬ程の痛みがあるわけではなく、銃で撃たれても、胸を軽く叩かれた程度の感じはなるのだが、リアルな銃声とそれにより起こる体の欠損はゲームに慣れるまで、かなり気持ちが悪くなる。

しかし、腕が千切れたり骨が折れたりする痛みは、熟練者にとってはず痒い程度になるのだが…

「あれ？俺、かなり頭が痛かったよな？打撲ぐらいなら、あんなに痛いはずがないのに…。」

不思議に思い額を撫でてみるが、やはりそこにあるのは大きなコブとリアルな痛み。

大会だけ、運営が痛感バランスを変更したのだろうか？

額を擦りながら考えていると、遠くの方に人らしき影が見えた。

「おーい！俺だー。ファルコンだー！」

まだだいぶ遠く、豆粒のようにしか見えないのだが、延々と同じ風景を見続け、一人で歩くことに飽き飽きした俺は大声をかけながらその人影に向かって全速力で走った。

その声が聞こえていないのか、まったく反応せずにピクリとも動かない事に疑問を感じつつも、人がいたことによる安堵感からか両手を振りながらバカみたいにどたばたと走る。

近づくにつれて、シルエットが大きくなり…

その人影がパーツを破損している事に気がついた。

身体には無数のウジがたまり、酷い腐敗臭を発するそれは。

首から上の、人体に必要なものが無くなっていた。

f i r e 4 (後書き)

6 / 2 3 f i r e 4 前編 f i r e 4 に変更

6 / 2 5 誤字修正

fire 5

膝を抱え、真っ暗な暗闇の中で1人ガタガタと震えている。

時間にして3時間前。

頭部を切り取られ、全裸の身体を板に磔にされていたその男を見るなり、俺は吐いた。

首の切り口からは、どす黒い血液が凝固したものと黄色い脂肪、そして白い骨が見え、身体中には多数の切り傷。指は全て切断されており、局部は切り取られていた。

悲惨な姿を晒す元は人間であつたモノを見て吐いた事も1つの原因ではあつたが、原因はそれだけではない。

N・R・O内では確かに多少の流血や人体のパーツの破損はあつたのだが、死亡すれば身体はポリゴンとなつて消えるし、破損したパーツも時間が立てば消えた。

しかし、あの死体は殺害されてから多少の時間はあつた筈なのに、消えることはなくリアルとしてそこに存在している。

そこから導きだされる答えは、この世界がプログラムによって造り出されたものとは異なり、リアルな現実の世界であると言うことだ

った。

それに気づいてしまった俺は、その死体から少し離れた所にある廃ビルの一室に持っていたトラップをしこたましかけ、閉じ籠ったまま今に至っている。

膝を抱えていた右手を離し軽く振ってみる。

普段なら沢山の数字やコマンドが詰め込まれたメニューバーを出すときに使う動作。しかし、今は何も出ることは無い。先程から何度も試してみているので結果は分かりきっているのだが、藁をもすがるつもりで振ってしまう。そしてそのたびにどうしようもない絶望感を味わってしまうのだ。

かつん

不意に外から音が聞こえた。

それに反応し、びくりと身体がはねる。

この世界に自分達と同じような動物がいるのであれば、ネズミかもしれないし野犬かもしれない。

しかし、もし人間だったら？

頭にあの死体がよぎる。

死体があつて、それは明らかに人為的に作られたもの。だとすれば、それを作った人間がこの付近にいると考えても何もおかしくはない。

こんな廃ビルに好き好んで侵入してくる人などいるわけがない。

何かの目的があつて侵入してきているのだ。

そしてもしもそうならば、自分も”あれ”と同じようになってしまふかもしれない。

一旦考え始めると、どんどん思考がマイナスな想像を紡ぎだす。

「くそつ。やられてたまるかつての」

腰のホルスターからベレッタM92とコンバットナイフを抜き、扉の近くに忍び寄る。

ビルの入り口と扉を挟んですぐ隣の廊下には多種多様なトラップを仕掛けてはいるが、逃げ場のないこの部屋に引きこもっていたのはどちらにせよじり貧になる。

暗視ゴーグルがないのでいささか視界は悪いが、ずっと暗闇の中にあつた目は暗闇でも戦闘を行える程には慣れてきていた。

ドアノブに手をかけ静かに扉を開き、左右を確認する。

月明かりにうつすらと照らされる廊下には暗闇と静寂以外の何物も

存在していない。

左右クリアリング。

それだけで気が抜けそうになるのを堪える。ここを見るだけでは安全を確保したとは言えない。

緊張による精神的な疲労と体力的な疲労が重なって、今すぐにも倒れこみそうになる身体に鞭を入れ、ビル全体の見回りを行うために廊下に設置してあったトラップを解除する。

全てを解除し終わると、最上階から一室一室チェックして回ることにした。

クリア

クリア

ゲーム内で行っていた癖か、1つの部屋を確認するたびにそう呟く。

殆どの部屋のチェックが終わり、一階の一番奥、最後の部屋に近づいた。

「 。 。 」

僅かな話し声。

一気に身体が緊張で固まる。

誰かがこの中にいる。

ベレッタを持ち直し、スライドを引いてチャンバーに弾を送り込む。

そして、身体の前に構えたまま扉に前蹴り、扉を突き破った。

「うごくな！」

部屋の中にいたのは少年と少女。

いきなり扉を蹴破り飛び込んできた俺に呆氣に取られていたようだが、すぐに氣を取り直したのか、少年の方が両手を広げ俺と少女の間に立ち塞がってきた。

怯えてしまい声を出すことが出来ないのか、一文字に結んだ口と涙に滲んだ目でこちらを睨み付けてくる。

「お、お前は誰だ？ここで何をやっている？」

そんな少年の表情に怯みながらも、問い掛ける。
が、返事はない。

ただじつとこちらを睨み付けてくるだけ。

と、少年の後から掠れた小さい声が聞こえた。

「どなた…ですか…？」

少女の声だ。

久しぶりの他人の声と、返事が返ってきたことに少しホツとする。

「俺は鷹尾。たかお せいや鷹尾誠哉。君の名前は？」

「タカオさん、ですね…。私はケイナと言います。貴方のお住まいに勝手に入ってしまったってごめんなさい。私はどうなっても構いません。だから…お願いします。この子だけは殺さないで…。」

15歳ぐらいだろうか。ボロボロの服を纏い、その服からはるくに食事を取っていないのか、細枝のような手足がのぞいている。

幼い顔つきには似合わない真っ直ぐで真剣な目は、俺の目を強く睨みつけている。

こんな目で見られことは今までの人生で一度でもあっただろうか。

「いや、殺すとか殺さないとかは全く考えてないから。というか、ここ…俺の住まいってわけでもないし。こっちこそ驚かせて悪かった。ごめんな。」

構えていたベレッタをホルスターに戻す。

「でも、君たちはこんなところで何をやっているんだ？てか、ここは一体どこで、あの……死体は一体な……」

がつん

後頭部に衝撃が走り、目の奥で火花が飛び散り、灼熱のような熱さと痛みに耐えきれず頭から地面に倒れこむ。

刈り取られていく意識の中、先程の少女が発した悲鳴と男の怒声が聞こえ、俺は意識を失った。

f i r e 5 (後書き)

6 / 2 3 f i r e 4 後編 f i r e 5 に変更

6 / 2 5 誤字修正

f i r e 6

黒い何かが空間に線を紡いでいる。

最初は規則正しく綺麗な線を紡いでいたが、時間が経つと共に不規則に動き始めた。

線は固まり、明滅し、歪み、脈動し、全てを塗り潰していく。

そしてそれは全身の毛穴から侵入し、身体を激しく揺さぶり踊らせ、グチャグチャと思考を破壊しながら、線は加速し熱をもたせる。

熱は身体を駆け巡り、感情を作り出す。

これははじけ飛ぶような喜び？

これは辛くて苦しい悲しみ？

これは全てを破壊するような怒り？

この、うねり狂う熱は、爆発しそうな熱は。

ブチッ、と。

頭の中でなにかが切れた感触がして。

周囲のあらゆる存在が線を描いて回転しだし、渦となり、その中心

に自分の身体を意識して、鷹尾はもどる。

自分自身への身体へと。

気がつくとき、毛布のような物の上に横たわっていた。

全身は寝汗でびっしょりと濡れ、カラカラに乾いた喉が痛みを訴える。

後頭部に手を当ててみると大きなコブ。

（そっぴや、殴られて気絶したのか）

頭を擦りながらごそごそと動いていると、足元の方から声が聞こえた。

「ん…起きたかい？」

呼び掛けてきたのは男の声。

視線の外からの声に姿を見ることができないが、気を失う直前に聞いた怒声と同じことに気づき飛び起きようとする。
が、頭に鈍痛が走り倒れこんだ。

くそっ

悪態を吐きつつ立ち上がろうと手足に力を入れるものの、その力は地面に吸収されるように霧散し、起き上がることはできない。

身体を起こすことを諦め、問い掛ける。

「お前は。…誰だ？」

「他人に名前を尋ねる時は先に自分から名乗れ、と親に教わらなかったのかい？…まあいいか。僕の名前はヒューズ・シン。見ての通り、しがない傭兵だよ。ところで君。コーヒー飲むかい？」

何故だか分からないが、俺はこのヒューズ・シンという傭兵とモーニングコーヒーを嗜んでいる。

芳ばしい豆の匂いが鼻につき、手の中にある黒い液体が頭を覚醒させる。

「やっぱりコーヒーはいいよねえ。身体中に染み渡る広がりのある香り。そして舌の上に残る、華やかさを残した苦味と酸味。まさに神の飲み物だよ。」

先程からコーヒーの事をずっと喋り続けている自称傭兵は俺の目には全く傭兵に見えない。

それはヒューズの服装によるものだった。

ダークブラウンの革靴。

上下真っ白なスーツ。

更に頭の上にも真っ白な中折れハット。

そんな男が傭兵に見えるわけがない。

仕草や話し方、その全てに気品が漂い、まるで貴族のような…

「でもね、僕は思うんだ。もしかするとコーヒーは僕の事を愛していないかもしれない。それは哀しいし泣き叫び頭を地面に打ちつけて死にたくなる。でも、僕が死ねばコーヒーを愛する者がこの世から1人減ってしまう。だから僕は死なない。コーヒーを飲んで飲んで飲み続けて、愛し続けるんだ。」

訂正。

只のキチガイだ。

俺は、痛くなってくるこめかみを揉みほぐしながらヒューズという男に話しかける。

「…いい加減にしてくれよ。あんたは一体何者なんだ。そんな格好

で傭兵だと？どんなイカれ野郎でも嘘なのは分かるだろ。俺の態度が悪かったなら謝る。すまなかった。俺の名前は鷹尾誠哉。…傭兵かな。」

最後の単語を言う前に僅かに言葉に詰まった。

嘘ではない。ゲームの中では部隊の一員として幾つもの戦場を駆け巡った。それは傭兵だと言ってもおかしくはないだろう。

この世界が、ゲームのVRで無いのだとすれば「ゲームの中で高所から落ちたらここに来ました。」なんて言ってしまうのは明らかにまずい。

険しい表情をしながら少し考え込んだ俺を見て、ヒューズは笑いながら答えた。

「まあ、人には言えないことの1つや2つはあるものだしね。タカオが傭兵だと言うなら傭兵なんだろう。それより、こちらも謝らないといけないんだ。昨日は殴ってしまつて悪かった。てつきりケイナとニルスが襲われている、と思つてしまつて。がつんとやってしまつたんだ。あ、ケイナとニルスはあの子達のことだよ。」

ヒューズは扉の方を見る。

つられてそちらを見ると、昨日の姉弟がこちらを少し怯えたような表情で見っていた。

こっちにおいで。

と、ヒューズ。

二人は呼びかけに反応し、足早にヒューズの横に並んだ。

「昨日は驚かせて悪かった。そっちの…」

「ケイナです。」

凜とした声でケイナが少し前に出る。

「ケイナには言ったと思うんだけど、俺は君達を傷付けようと思っていた訳じゃなかった。その…話し声が聞こえて、敵かと思って飛び込んだんだ。」

腰を折り、頭を下げる。

「結果、銃を突き付け君達を驚かし、怯えさせてしまった。本当に悪かった。ごめんな。」

少しの沈黙。

その沈黙を破ったのは、ケイナだった。

「頭を上げてください。別に私達は怒っていませんよ。ちゃんと謝ってもらえだし、理由も分かりました。だから、ほら。」

頬に手があたる。

その手は俺の頬をなぞりながら、顔を上げさせる。

上げた顔の前には小さなすみれ色の花があった。

「弟と一緒に摘んできたんです。これで仲直り。受け取ってください。」

「ん…ありがとう。」

少し照れながらも、俺は名前も知らないその花を受けとった。

「よし！じゃあ仲直りも済んだ所で朝御飯にしますか。タカ才君も良かったら一緒にどうか？勿論コーヒーもあるよ。」

そういえば、昨日から何も食べていなかった事を思い出す。

「コーヒーは別として…ありがたくお誘いに乗らせてもらおうかな。」

ヒューズの軽快な声に誘われ、俺はこの3人と朝食を食べる事になったのだった。

f i r e 6 (後書き)

6 / 2 5 誤字修正

f i r e 7

お世辞にも美味しいとは言えない簡素な朝食を食べた後、俺は昨日見た死体についてヒューズに尋ねていた。

「それはイルヴァールがやったことだと思うよ。この第72廃棄特区を管轄しているのは彼らの旅団だからね。たぶんだけど、それを知らずに外から入ってきてしまったんだろうねえ。殺されて、見せしめとしてあそこに飾られているんだろう。」

「じゃあ、そんなに嚴重に守られているということは、廃棄特区って地域は相当重要だということなのか？ 見てみる限り、廃墟ばかりで人間が住めるような場所じゃないと思うのだけど。あと、イルヴァールってのは何？ 人の名前か何かか？」

ヒューズはこちらをチラリと見た後に、顎をわずかに振り部屋から出ると廃ビルの階段を上っていく。

階段の果てにあったものは扉。その扉を開けるとそこは屋上だった。

時間的にはまだ昼ごろだろう。

しかし、開け放たれた屋上から見える空は灰色の雲が厚く覆い、今でも雨が降り出しそうなものだった。

ヒューズは胸のポケットから紙巻タバコを取出し口にくわえると、こちらにもそれを差し出してくる。

「いや、タバコは吸わないんだ。健康に悪いからな。」

「健康か。まったくおかしな奴だね。君は。」

軽く笑うと、オイルライターでタバコに火をつける。

鼻を突くアンモニアの匂いと煙が俺のほうに流れてきて少し噎せたが、生ぬるい風がその紫煙を曇天の空に運んで行った。

「さて。何から話そうかな。」

白スーツの男はタバコを啜えたまま、こちらをまったく見ることもなく話し始める。

「廃棄特区には何もない。家も、畑も、家畜も、工場も、何もない。名前の通り捨てられた街さ。ここにあるのは死と瓦礫だけ。守る物も無いし、守る価値も無いんだよ。」

「じゃあ、なんで管轄するものがあるんだ？なんで侵入者が殺される？」

「ここを出ると死ぬからだよ。」

いや、と言葉を変える。

「ここでも、死ぬことには変わりはないね。侵入しても殺される、侵入しなくても殺される。結局結果は同じだよ。」

まあ、見ればわかるさ

そう言つて、ヒューズは俺をビルの一番端まで誘う。

そこから見えた光景は。

息をするのも忘れてしまう。

いや、正しく表現すると、口から入った酸素が体に取り込まれず、

また口から出て行ってしまったている。

体が震え、グラリと揺れる。

「おっと。危ないなあ。」

ヒューズに腕を掴まれ引き戻された。

「これは…一体どうなっているんだ…!？」

無残に打ち壊されたビル。

止まったまま動かない時計台。

瓦礫がつもり、ひび割れ、元の仕様をまったく成さなくなってしまった道路。

そんな廃墟の先には壁があった。

廃墟と化した街を10mほどの高さの壁が、まるで万里の長城のようにつねりながら地平線まで続いている。

そしてその壁の向こう側には 何もなかった。

褐色色の荒野が延々と広がっているだけで、人工物らしきものや緑の自然は何もない。

「何も無い…。」

掠れた声で呟く。

「だから言ったでしょ。何も無いって。ここから出たら死ぬって。」

ぴん、と啜えていたタバコを指で弾き、ビルから投げ捨てながらヒューズは続ける。

「何も無いんだよ。ここには。あるのは絶望と銃声と死だけさ。」

まるで英国紳士のように優雅に腰を折る。

ようこそ。

ようこそ、僕たちの世界へ。タカ才君。

fire 8「前編」

ウーウーウー

赤い光の点滅と共に身体の芯に響くようなサイレンの音が響き渡る。

『哨戒部隊より通信。中隊規模の敵勢力が第一防衛ラインに接近。繰り返す。中隊規模の敵勢力が第一防衛ラインに接近中。』

暗闇の中で白い線のようなサーチライトが入り交じり、最前線からの通信が現状を絶え間なく更新していく。

「くそつ。何で俺が哨戒任務に当たっている時にこんなドンパチが起きるんだよつ。マジで運がねえ！」

シフル・フルシチュワニ等兵は簡易に掘られている塹壕に身を隠しながら、悪態をついていた。

彼がこの部隊に入隊してから行った戦闘は0。訓練では経験していたが、訓練はあくまで訓練。本番の”それ”とは全くと言っても良いほど異なる。

どおおおん！！

大地を揺らす激しい衝撃と爆音。

パラパラと塹壕の土が崩れ、衝撃を吸収する。

『機関銃大破。RPG-7によるものと思われる。我々の武装では抵抗不可能。哨戒任務は破棄。即時撤退を求む。繰り返す』
通信から大きな爆発音と悲鳴を帯びた怒声が聞こえる。

敵勢力は隠密行動を止め、突破攻撃を仕掛けてきているらしい。

機関銃を破壊後、塹壕に侵入。歩兵を殲滅して塹壕を制圧しながら一点突破を行い、哨戒陣地を深く決るつもりなのだろう。

夜間戦闘により航空戦力が投入されていない事は唯一の救いだ、この場においてはあまり変わらない。

『本部より哨戒部隊へ。即時撤退は許可しない。防衛ラインを死守せよ。』

『つつ…了解。』

参謀本陣から無慈悲な死刑宣告が下される。

「20人程度で中隊規模を食い止めるだど！本部は俺達に死ねと言うのか！？援軍は！援軍は来ないのか！？」

隣からの悲痛な叫び声が聞こえる。

階級章には星が2つ。

こいつも、俺と同じ二等兵。

多分新兵だろう。

「援軍なんてくるわけないだろ。俺達ごと155？榴弾砲でズドンだよ。200対20でお釣りが出るほどさ」

冷静を装いながら声を返した。

頭の中は色々な感情がぶつかりあっているが、それを無視して言葉を紡ぐ。

「命令は絶対だ。今俺達が出来るとは敵を長くここに引き付けること。別にマシンガンを抱えて敵に突撃することじゃない。」

自分に言い聞かせるように、大きな声で怒鳴る。

しかし、身体は正直に反応し、膝はガクガクと笑い、ライフルを握る手からは大量の汗がしたたりおちる。

「くそつ。くそつ。…なんでだよ！なんでこんな目にあうんだ。簡単な夜間偵察任務のはずだろ？それなのに、夜間に奴らが攻めてくるなんて聞いてねえよ。死にたくない…死にたくないよ…。あああああああああああああああああああ！！」

顔から体液を垂れ流し、意味の分からない奇声を放ちながら、隣にいた名前も知らない新兵は塹壕を飛び出し、本陣がある方向に向かって走り出した。

うわあああああああああああああああああああ。

暗闇の中で激しい銃声が聞こえる。

そして、その銃声が止んだ時には奇声は聞こえなくなっていた。

「つち。馬鹿野郎が。どこにも逃げる場所なんてあるわけないだろ。俺たちにできる事は戦って死ぬか、殺して殺して殺して殺して、生き延びるしかねえんだよ。」

シフルは誰に言うわけでもなく、ボソリと呟く。

それはこの世界においての真理なのかもしれない。

殺すか、殺されるか。

そして、人間は生き残る為に前者を取る。

「全く。なんて最低で、分かりやすい世界なんだ。」

悪態を吐き捨て、銃身を握りしめる。

『各員に告ぐ。合図と共に敵に向かい斉射。その後、各々個人の判断の上で徹底抗戦。以上だ。』

最後の指令が下され、塹壕から半身を出しライフルを構える。

暗闇の向こうには何も見えない。

しかし、そこには自分たちと同じように、生きた人間がいるのは分

かる。

闇の中で装備がぶつかり合う音、地面を走る音、そして息づかいが聞こえてくる気がした。

『つてえー！！！！！！』

全力でトリガーを引く。

沢山の発射光が花火の様に輝き、銃声が死の輪舞^{ロンド}を奏でる。

それはとても綺麗に見えた。

「報告書」

敵戦死者：211名

味方戦死者：23名

第一防衛ラインは破棄。

fire 8「後編」

地下にある、コンクリートにより作られた薄暗い通路。

その通路を1人の女が歩いている。

「だから言ったではないか！あのような人数では、対処できるわけがないと。元々夜襲を受けるのを折り込んでいたのであれば、せめて師団規模の兵力を在駐させておくのが、参謀本部としては当たり前的事だろうがっ！」

カツカツと足音を立てながら、怒声を撒き散らす。

「ふざけるなっ！あの防衛ラインを築く為に、何人の兵が命を散らしたのか分かっていいのか！？それを一夜で無駄にしゃがって…もういいっ！私は今から新兵の訓練視察がある。お前らの戯言に付き合っている暇などないわっ」

先日の最前線で起こった夜襲。配備されていた部隊を遥かに超えた敵勢力の進行により、防衛ラインは破棄され、配属されていた部隊も全滅した。

しかるべき対応をとった上での敗戦ならばまだしも、上層部の都合により味方を生け贄として行われた殲滅戦は、彼女の腹を煮えたたせるには十分だった。

「挙げ句の果てには、新しい部隊を作れ、だ…。この街に戦える人間が残っているのかさえ分からないと言うのに。上層部は一体何を考えているんだ！」

女性には不釣り合いなアーミーブーツで壁を思い切り蹴り付ける。

しかし、足に伝わる鈍い痛みは彼女の気を晴らすには到底及ばない。

「伍長。新規志願兵のリストをよこせ」

「…。はっ！」

彼女の後ろについて歩いていたのであろう、伍長と呼ばれた男は彼女の怒りに怯えながらも、ファイルに綴じられた数枚のリストを手渡す。

「……………どいつもこいつも冴えない面を。まだ子どものような面をしている奴もいるな。伍長。貴様はこいつらにはもう会ったのか？」

「いいえっ。私はまだ見ておりません。…志願兵は第2訓練場にて待機し、小尉殿の到着を待っていると思われますっ」

「成る程。では早速この不細工な面を拝みに行くとするか」

「はっ」

第2訓練場

「小尉殿に敬礼っ！」

ザッ

まだ訓練も始まっていないような新兵たちの不揃いな敬礼。ブカブカな装備。ライフルを持つ腕が微かに震えているのを見ながら、頭が痛くなるのを、こめかみを指で押さえつけて我慢する。

「直れっ。小尉殿より訓示を頂く。小尉殿お願い致します」

この部隊を訓練する役なのであろう、歴戦の古傷が刻まれた厳めしい顔の軍曹が此方に向き直る。

「貴様達は志願兵だと聞いている。何の為に志願したのかは知らないが、部隊に配属された以上、貴様達は逃げる事は許されない。己の為に戦い、街の為に戦い、守るべきモノの為に戦え。その為に、これから貴様達には過酷な訓練が待ち受けている。それ乗り越えた上で、真の戦士となることを期待している。貴様達に神の祝福と幸運を。以上だ」

毎回の様に糞ッタレた甘い言葉を新兵にかける。

いったいこの中で何人が生き残れるのだろうか。

昨夜の様に、ただ上の命令で使い捨てられ、紙の上の数字でしか判別されないであろう、新兵に少しの同情の念を感じる自分に驚く。

（私は一体何を考えているのだ。これが戦争なんだ）

頭を軽く振り、曇天の空を見上げながら深く息を吸う。

「なっ!?!」

見上げた空の先、高いビルの上には白いスーツを着た私の良く見

知った男と、その隣にいる線の細い黒髪の男が立っていた。

「すまない。少し用事が出来た。後の視察は任せる。好きにしよう
てやってくれ」

そう言い残して、私はその男がいたビルに向かって駆け出していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1896u/>

Bullet-time

2011年8月19日22時35分発行